

学校との連携事業について（アクセス含む）

平成 25 年 1 2 月 文化振興課

1 前回部会での議論概要

・自然史博物館

校外学習は年に 1 回という学校もあり、自然史博物館にも来て欲しいが限界を感じる。学芸員や普及員が学校に行って話をする方法もあるが、事前の打ち合わせ等にも時間がかかり、あまり増やすと館での受入れを減らすことになってしまう。参加人数だけでみれば館で受け入れた方が効率的なので、こうした活動の成果は反映されない。どう説明したら質を成果に反映させることができるのか、その手法を知りたい。

・土屋文明記念文学館

学校で講座を開くとき、希望に見合ったものを提供するためには、先生の意見をもっと吸い上げていかなければならないと思う。しかし、日頃は学校との付き合いがあまりなく、講座の準備のために会うだけになっている。国語の先生方との接触をもつ機会を増やしたい。

・歴史博物館

市町村では、スタッフの数が少なく、ひとりの学芸員が複数の館を担当するなど負担が大きいことが問題となっている。新しいことに取り組むことが難しいので、こちらからパッケージ化したものの提案などをしていきたい。また、3月に歴史博物館を利用していない学校に対して、なぜ利用していないのか調査をおこなったところ、小学 3 年生の回答では「他の施設に行っている」がもっとも多かった。他の施設とは地元資料館などを指しており、こうした施設との連携をどうしていくのかを考える必要がある。また、小学 6 年生では「授業日数が足りない」という回答が多く、校外学習で一日つぶれてしまうのでは、授業としてやりづらいというのが、正直なところだと思う。その中でどう利用してもらうかが課題である。

・館林美術館

周辺の学校が授業として美術館見学を取り入れてくれているが、足のことが問題となっている。近いところは徒歩でこられるが、遠距離になると公共交通機関を使うことになる。しかし、館林美術館にはバスが 1 日 4 本しかない。市や県のバスを使って送迎してくれるような制度があればよいと思う。

・近代美術館

教育現場に出て行くのを増やすと、受入れが減ってしまうという話があった。もしマンパワーが増やせるならいいと思う。

・委員

市町村との連携の前提となる 5 館自体の連携の工夫、**学校現場との実質的な連携の手法**、入館者以外の評価基準のあり方と説得力、施設へのアクセスの問題などは、**次回以降の課題**としたい。

2 他県の事例

- ① 栃木県立美術館（県美アートクルーズ事業）
- ② 金沢 21 世紀美術館（ミュージアム・クルーズ、教職員対象展覧会無料招待ウィーク）
- ③ 石川県立美術館（マイ・ミュージアム事業）
- ④ 山口県立山口博物館（ミュージアムティーチャー事業）